

# 日本ジオパーク再認定審査現地審査報告書

ジオパーク名：とち鹿追.

現地審査員：中川和之・竹之内耕・山崎由貴子

## A. 基本情報

面積	404.70 km <sup>2</sup>
人口	5,542 人 (2015 年国勢調査)
日本ジオパーク認定年	2013 年
前回の審査日程および審査員名	2013 年 8 月 25 日～27 日 高木秀雄・原田卓見・熊谷 誠
ウェブサイト (URL を記載)	<a href="http://www.geopark.jp/geopark/tokachi-shikaoi/">http://www.geopark.jp/geopark/tokachi-shikaoi/</a>
ソーシャルメディア (すべて列記)	1. facebook <a href="https://www.facebook.com/とち鹿追ジオパーク推進協議会-131546847006037/">https://www.facebook.com/とち鹿追ジオパーク推進協議会-131546847006037/</a> 2. YouTube 十勝毎日新聞協力 <a href="https://www.youtube.com/watch?v=LHmV4W0z1P0">https://www.youtube.com/watch?v=LHmV4W0z1P0</a> 北海道地図株式会社協力 <a href="https://www.youtube.com/watch?v=Tr93SoP0p88">https://www.youtube.com/watch?v=Tr93SoP0p88</a>

## B. 提出書類一覧

### JGC に提出した書類

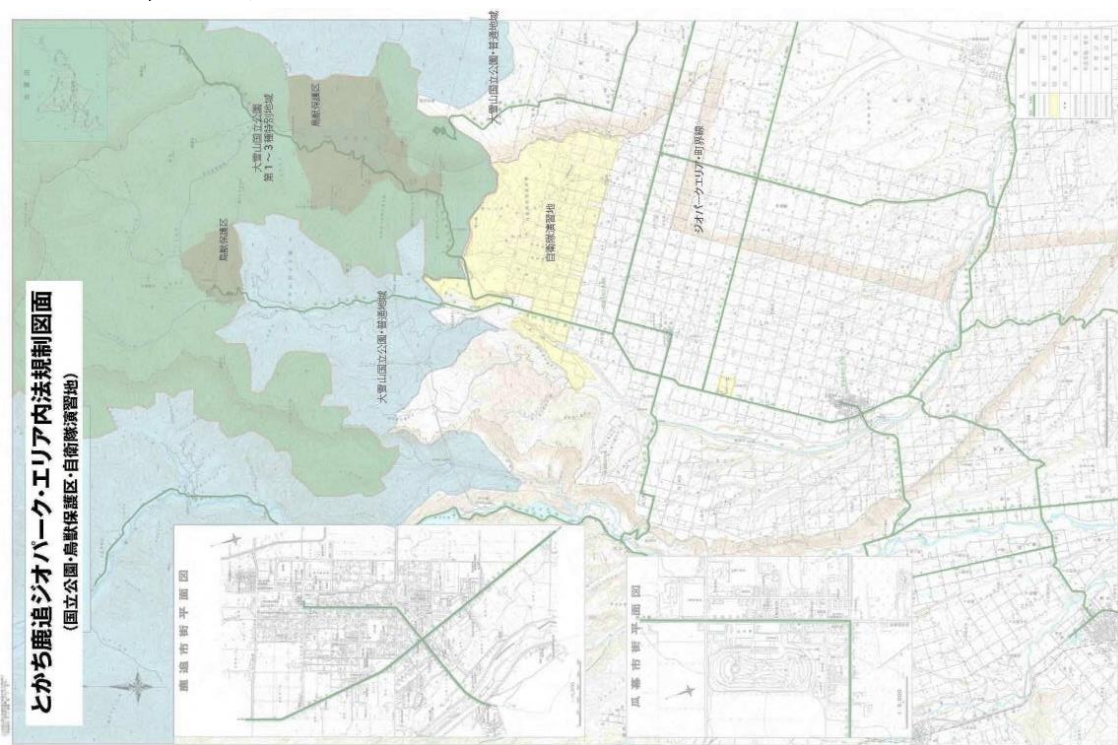
現況報告 (本文と添付資料、巻末資料)

### 審査期間中または審査後に直接審査員に提出した書類

【1】H29 年度協議会議案書 【2】会議録 (観光 (ツーリズム) 部会、教育部会、保全部会) 【3】第 14 回幹事会・結果報告 【4】幹事会構成員名簿 【5】事務局員名簿 【6】第 2 期中期計画に関わる予算計画書報告について 【7】平成 29 年度第 4 回鹿追町議会定例会・本会議 議事録 (ジオパーク関連) 【8】他ジオパーク視察実績 【9】ジオサイト・自然遺産・文化遺産・無形遺産のリスト 【10】保護指定区域のリスト 【11】とち鹿追ジオパークジオサイト情報一覧 (2017) 【12】平成 27 年国勢調査鹿追の人口 【13】鹿追町林班図 【14】とち鹿追ジオパーク保全図面 【15】とち鹿追ジオパークが使用する SNS 【16】旧ジオサイト一覧表 【17】ジオサイトの整備及び活用について (2014.6) 【18】東瓜幕露頭の現状写真 【19】扇ヶ原解説板の解説部分 (写真) 【20】十勝毎日新聞記事 (専門員の採用について) 【21】ジオサイト解説板の内容について (写真と版下原稿) 【22】日本ジオパークネットワーク再認定審査プレゼンテーション資料 【23】とち鹿追ジオパークと鹿追町行政機関の連携について 【24】鹿追町のグリーンツーリズムの取り組みと今後の課題 【25】日本ジオパーク認定の町北海道鹿追町 (町役場発行パンフレット) 【26】A town designated as a Japanese Geopark SHIKAOI TOWM (25 のパンフレット英語版) 【27】チビスロウ鹿追板 (業者発行地域版情報誌) ※有料 【28】とち鹿追ジオ MAP (とち鹿追ジオパーク推進協議会発行) 【29】鹿追町イベントガイド (町役場発行) 【30】空いろ森いろ歩き方 (道の駅しかおい観光案内所・鹿追町観光協会発行パンフレット) 【31】空いろ森いろ十勝の鹿追町 (道の駅しかおい観光案内所・鹿追町観光協会発行パンフレット) 【32】SHIKAOI 鹿追

(町・鹿追町観光協会発行パンフレット) ※日本語と英語併記 【33】 SHIKAOI 鹿追 (32  
 パンフレット中国語版) 【34】 鹿追ガイド (鹿追町観光協会発行情報誌) ※有料 【35】  
 然別湖ネイチャーセンター (株式会社 北海道ネイチャーセンター発行リーフレット)  
 【36】 Boreal Forest スノーシューで歩こう! 2017-2018 冬の十勝、然別湖の森へ... (ボ  
 レアルフォレスト発行リーフレット) 【37】 Boreal Forest ボレアルフォレスト 2017 然  
 別湖カヌー&自然観察&トレッキング (ボレアルフォレスト発行リーフレット) 【38】  
 然別湖\*自然観察会~森に親しむ~2017年5月~10月 (各月1回) (ボレアルフォレスト  
 発行チラシ) 【39】 しかりべつ湖コタン Lake Shikaribetsu Igloo Village 2018.1.27~  
 3.21 (然別湖コタン実行委員会発行) 【40】 鹿追町環境保全センター (町役場発行パン  
 フレット) 【41】 鹿追町環境保全センター瓜幕バイオガスプラント (町役場発行パンフ  
 レット) 【42】 家畜ふん尿由来水素を活用した水素サプライチェーン実証事業 (町役場  
 発行リーフレット) 【43】 大雪山国立公園 (環境省発行パンフレット) 【44】 十勝シ  
 ーニックバイウェイ十勝平野・山麓ルート MAP (清水町・新得町・鹿追町・士幌町・上士  
 幌町・足寄町・陸別町発行リーフレット) 【45】 Kotan in lake Shikaribetsu 30th (然  
 別コタン実行委員会発行パンフレット) 【46】 若者の「地域」志向とソーシャル・キャ  
 ピタル (一部印刷) (梶井祥子編文献) 【47】 VISIT TOKACHI PASS ※英語と中国語併  
 記 (十勝バス株式会社・拓殖バス株式会社発行海外旅行者向けバス 1日2日券チラシ)  
 【48】 とかち鹿追ジオパークしかりべつ湖コタン・タイアップ企画ジオイグラー2016 結果  
 報告書 (鹿追町役場ジオパーク推進室作成) 【49】 然別湖冬の環境学習 (株式会社北海  
 道ネイチャーセンター発行パンフレット) 【50】 然別湖環境学習のご案内 (株式会社北  
 海道ネイチャーセンター発行パンフレット) 【51】 キーマンインタビュー 黒井敦志商  
 工観光課長 (一部印刷) (町役場発行) 【52】 台風 23 号の被害状況とその対応 (とかち  
 鹿追ジオパーク推進協議会作成) 【53】 とかち鹿追ジオパーク-火山と凍れ (しばれ)  
 が育む命の物語- (とかち鹿追ジオパーク推進協議会発行リーフレット) 【54】 文部科  
 学省研究開発学校 (平成 27~29 年度) 鹿追町幼小中高一貫教育研究大会 (鹿追町幼少中高  
 一貫教育推進会議) 【55】 文部科学省研究開発学校 (平成 27~29 年度) 公開授業 学習  
 指導案 (鹿追町幼少中高一貫教育推進会議)

### C. 地域の地図



## D. 前回の指摘事項に関する取組・改善点

認定保留の際、早急に対応が求められたのが、以下の2項目（1、2）である。

### 1. 推進協議会の組織体制と運営方法の強化

保留後に強化した組織体制を、さらに2017年度から、元議会事務局長で教育委員会経験もある町幹部が商工観光課長との兼務でジオパーク推進室長（推進協議会事務局長）として全体を統括し、兼務を含めて6人の体制とした。このことで、町役場全体や議会、町内の多様なステイクホルダーとのつながりも強くなっている。幹事会の元に置かれている教育、保全、観光（ツーリズム）の各部会は、観光部会では、「じゃがいも食べ比べツアー」、「そば食べ比べツアー」のような、具体的な事業の実施につながっている。これらのツアーは、定評のある同町の地域活動においても、「これまでに見られなかった町民ボトムアップ型の活動」であり、ジオパークの成果と自己評価している。

一方、教育部会や保全の部会は、定評のある既存の取り組みとジオパークの運動の関わりが、十分整理されていないところが見受けられる。これらには、つなぎ役の専門員の不在という影響もあると思われる。上記のツアーの結果、農産物のおいしさと大地の特性の科学的根拠を求めており、地域のニーズにきめ細かく対応する専門員が期待される。

認定審査時に指摘された「エリア全体のジオパークマネジメント」の問題については、「既にある活動を、ジオパークで繋ぎ合わせる、プラットフォーム型の活動」という共通認識を持つことによって、教育や保全、エコツーリズム、グリーンツーリズム分野の活動で定評のある鹿追において、ジオパークの持つつなぐ力の意義を再確認し、上記の「ツアー」のような活動が生まれるに至っている。

ただ、これらは、再認定審査を控えて、2年前から動き出した変化で、実績としてはこの1年内である。再認定審査後に、これらの動きが止まらないためにも、早急な専門員の雇用と、それによるきめ細かいプラットフォームの構築が求められる。

### 2. 情報発信

保留時は計画だけだったWebサイトやリーフレットなどによるジオツーリズムの広報の具体的な展開は、後述するように一定程度は進められているが、まだまだ十分とは言えない。

### 3. ストーリーとジオツーリズムの設定

火山活動と大地の形成史（約100万年前、約30万年前、数万年前、それ以降）を物語るジオサイトが選定され、野外解説板が整備された。大地の形成史が、ビジターセンターのプロジェクションマッピング展示で示されるようになり、然別エリアと鹿追エリアを結ぶ大地の形成史が視覚的にわかるようになった。しかし、ジオサイトの野外解説板には、火山活動と大地の形成史（通史）を示す簡潔なイラストが示されていないことで、今いるジオサイトの説明が通史のどこを見ているのかがわかりにくい。これは後述するように、サイトの科学的価値を吟味しながらサイトをさらに精査していく過程で、わかりやすい通史の説明をつくっていくことが求められる。

後述するように、ツーリズム部会によってイモのツアー、蕎麦ツアーなどが発案され、既存の農家ツーリズムに火山や土壌の要素が加わったツアーが開発されてきており、一定の取り組みの進展がみられる。

### 4. ジオサイトの整備と保全

多くを占める地形学や生態学的サイトのほかに、地質学的サイトとして、十勝三股火砕流露頭（西瓜幕）に誘導看板と解説板が整備された。新たに発見された化石林や亜炭層のジオサイト化が検討されている。然別湖が大地形成過程での位置づけが不明とされたが、ガイドによって湖が溶岩による堰止湖であることがわかりやすい言葉で説明された。



認定審査時にジオサイトとされていた、東瓜幕火砕流露頭（トレンチ露头、写真は2016年10月の様子）は、土地所有者が埋め戻す予定であり、現在はジオサイトから外している。また、ジオサイトの全面的な見直しが行われており、新規認定時はジオサイトとして施設

群を含めて 27 設定していた。指摘を受けてジオサイトを精査し現在は 17 のジオサイトを設定している。

また、地域が眺望できる扇ヶ原展望台に地形を説明できる解説板が不足しているという指摘について、同場所に解説板が設置されていた。平野と山間部の間にある扇状地や流れ山の説明が日本語と英語の併記で書かれている。



## 5. 地域住民の啓発と参加

ジオパークに直接的に関わる地域活動として、ジオカフェが行われている。その他のジオパークに対する市民の参画としては、ジオサポーター制度がある。現在は 30 人が会員となっている。

## 6. 専門職員の採用

学術分野では Skype による会議を利用しながら、福山市立大学の研究者の積極的支援が継続されている。しかし、事務局に専門員がいないことで日常的な科学教育業務の推進という点に弱点がある。専門員の採用を検討することについて推進協議会長（町長）が「専門の職員について、適任者がいれば事業の体制を整えていきたい」と発言した（12 月 6 日、町議会本会議において）。

## 7. ガイド体制

2017 年 6 月よりガイド養成講座を開催している。本養成講座において必修講座を全て受講すると、ジオパーク認定サポートガイドになることができる。サポートガイドとして一定の経験を積めば、ガイド認定テスト受験資格が与えられ、合格するとジオパーク認定ガイドとなる。現在は養成講座受講生が町内外で 13 名いる。また、ジオパークの PR やストーリーを語る事業者としてジオマスターの店認定制度を設けており、現在 28 店舗が登録している。

## 8. 拠点施設

2014 年に職員が常駐するビジターセンターがオープンし、2016 年にはプロジェクションマッピングを導入するなどリニューアルしている。これまでに約 5,000 人が来館し、年間約 3,000 人のペースで来ている。町内への周知は不十分である点が見られるが、学校の授業でも活用されるなど、少しずつ広がりが見られる。

## 9. インフラ整備、商品開発

Web サイトは開設済みである。推進協議会が作成したリーフレットがあり、拠点施設や道の駅、ジオマスターの店など各場所に置かれている。また、町作成のパンフレットやガイドブックにジオパークの文字が入るなど、可視化が進んでいる。看板について、誘導看板 8 基、解説看板 8 基、サイン看板 10 基、案内看板 2 基、鳥瞰図 2 基が整備された。設置可能な部分から着実に実行されているが、一方で看板の作製や回収に関する枠組みは確立されていない。ジオパークに関連した商品開発の推進については、現状できていない。ただし第 2 期中期計画（案）には、来年以降の STEP2 で行うこととなっている。

# E. ユネスコ世界ジオパーク運営指針基準の検証

## E.1 領域

### E.1.1 地形地質遺産および保全

十勝火山や然別火山の火山活動を示す、約 100 万年前、約 30 万年前、数万年前の火山噴出物や崩壊堆積物などがジオサイトとして選定されている。十勝三股火砕流露頭・南ペトウル山・然別湖・流れ山地形・風穴などがその代表である。ジオサイトの多くが大雪山国立公園内にあり保護されている。一方、法的保護がない鹿追エリア（平地部）にあるジオサイトをどのように保全していくか検討を要する。また、ジオサイト 6 ヶ所には解説板が設置されている。

科学的価値を検討する基礎資料である地形地質遺産や自然遺産・文化遺産・無形遺産の

リストができているが、ジオパークで使用する資源を一括してジオサイトとしていることや地形地質遺産とその他の遺産における関連価値のアピールが弱いという問題がある。JGN 保全ガイドラインに沿ったサイト分類への改善が求められる。さらに、それに整合した形で、すでにある台帳の整備を進められたい。このように地形地質遺産とその他の遺産の因果関係の検討があいまいであることが、テーマである「火山と凍れが育む命の物語」を証拠づけるモノやコトが来訪者へ簡明に示されていない要因と考えられる。具体的には、野外解説板が設置されている代表的ジオサイトが、然別火山と大地の形成史の中でどういう位置づけなのか簡明に示されていないこと、また大地の形成と自然、暮らしの関係が明確に示されていないことなどに表れている。「火山と凍れが育む命の物語」の根拠となり、自然や暮らしに影響を与えているジオサイトを充実させてほしい。

西瓜幕火砕流露頭において、見学の妨げになる草や低木の伐採、露頭解説板の位置などの改善が合わせて求められる。一方、化石林や亜炭層などの新たなジオサイト候補地が市民の活動により発見され、大地の形成の新たな物語が加えられようとしている。

上述したようなサイトの科学的検討や解説内容などの遅れは、後述するように事務局における専門員の不在が影響していると考えられ、日常的な科学・教育業務を自前で行えないという弱点がある。

論文によって公開された宝石質のオパール産地の保護について、森林管理署や環境省との連携によって町条例を含めた保護策の検討が進められている。また、2015年の台風によって被害がでた然別湖周辺の登山道の緊急改修が、ジオパークと自然休養林保護管理協議会が連携をとることによって迅速に行われ、この共同作業が、整備に参加した市民のジオパークの保全意識を高める契機となった。今後の住民の保全活動のさらなる進展が期待される。

特に重要な地形地質サイト：然別湖（溶岩堰止湖、数万年前）、東ヌプカウシヌプリ（火山地形と風穴、数万年前以降）、西瓜幕火砕流露頭（火砕流、約100万年前）、南ペトウル山（成層火山、約30万年前）

指摘事項 有

指摘事項：

- ・ジオサイトリスト、保全リストの早急な作成が必要である。科学的な根拠を示し、鹿追町の大地の成り立ちを考慮し、地域全体でサイトの選定、リスト化することが必要である。
- ・リストの作成後、保全についての方針を定める必要がある。保全については地域で方針を決め、モニタリング等実効性のある措置をとるべきである。既に鉱物資源や野生動物について早急に保護が必要なものもあるので、早急な対応が必要である。

### E.1.2 境界線

ビジターセンターやジオパーク情報館にある展示物中の地図情報、ジオサイトマップ（リーフレット）やウェブサイト等の地図情報にはジオパークの境界線が明示されている。

指摘事項 無

指摘事項：

### E.1.3 可視性（ビジビリティ）

鹿追町最寄りのJR駅（新得駅）には、ジオパークのパンフレットが置かれている。町外から町内へ入る所に立て看板があり、看板の下にジオパークという文字が書かれており、商店街の街灯の下にはジオパークのロゴマークが描かれたタペストリーが設置されている。また、事務局が作成したポスターがあり、町内のホテルや店舗に掲示されている。今回の審査時には、ネイチャーセンターや宿泊ホテルに掲示されていたのを確認している。ジオパーク関連の店舗や施設ではのぼり旗の設置も見られ、町内におけるジオパークの可視化は進んでいる。今後は最寄りの空港である帯広空港やその周辺にもジオパーク関連のパンフレット等が置かれると望ましい。

事務局が作成したリーフレット以外の印刷物にもジオパークという文字やロゴマークが使用されている。例えば、然別湖ネイチャーセンター（株式会社 北海道ネイチャーセンター）が作成したパンフレットの中にジオパークという記載が入っており、これらは修学旅行誘致の営業の際などに配布している。また、イベントのチラシやバイオガスプラントのパンフレットや町作成の観光パンフレットなどにもジオパークの文字が書かれている。更に今後全ての庁内文書にロゴマークを使用するとしている。ロゴマークは申請をすればだれでも使用することができるので、町内の工事施工業者や北海道の他観光地で行うイベントのチラシなどでも活用してもらえるようにしたいという積極的な姿勢が見られた。現状は事務局が主体となり可視化を進めているようであるが、今回の審査では地域住民を初め多くの人から協力的な姿勢が感じられ、今後に期待ができる。

インターネットでの情報発信について、現在 Web ページが開設されており、Facebook も活用している。また、新聞社の協力などにより PR 動画を Youtube にアップするなど、情報の発信も進展が見られる。しかし、ジオパークネットワークへの情報提供などは不足しており、今後はより一層の貢献が求められる。また Web ページの更新頻度はあまり高くなく、Facebook は週に 1~2 回ほど更新している。Web ページの創り込みや多言語への対応など、改善の余地がある。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・ジオサイトを見学するに当たり、解説板の位置が適切でないと思われる場所がある。土地管理者との協議を行い、最適な場所への設置に尽力すべきである。
- ・既存の活動を尊重しつつ、鹿追町全体でジオパークをどのように可視化していくべきかを地域で協議し決める必要がある。
- ・最寄りの空港や近隣の観光地など、町外でのジオパークの可視性を高めていくことが望ましい。

#### E.1.4 施設・インフラ整備

2014 年に事務局員が常駐するビジターセンターが開設され、2016 年にはプロジェクションマッピングを導入するなどリニューアルを行っている。岩石標本の展示や火山灰の顕微鏡観察、イワナの飼育展示など、展示館としての質は高い。展示されているパネルは、所々難しい部分や細かい表記の誤りなどはあるが、イラストや写真が多く活用されるなど見やすい工夫がされている。リニューアルオープン後の来館者は延べ 5,000 人で、リニューアル前と比べると約 10 倍になっている。ジオツアーや学校教育に活用され、地域の人がジオパークに関係する相談事を持ち込むなど、気軽に立ち寄れる施設としても機能し始めている。併設されている宿泊できる施設は、研究者や学生らの長期滞在が可能で、ジオパークとして必要な科学的調査研究を支える場となっている。現状は地域外の人への活用が多く、地域内の人への周知や連携について改善の余地がある。また、推進協議会の事務局となっていることは、ジオパークのワンストップセンターというプラスな面もあるが、一方で司令塔であるべき事務局長が本庁に分かれていることによる認識の共有などの懸念材料もある。

また、中心部の道の駅にジオパークの無人の「情報館」を開設し、リーフレットなどを置くほか、書き込み可能な地図ボードで熊の出没情報なども案内している。

センターが、然別湖と町中心部や農村地帯との中間地点にあり、双方をつなぐ場所としての意義もある。一方で、然別湖には、ジオパークとしての拠点施設はなく、協議会メンバーの北海道ネイチャーセンターやボレアルフォレストが、パンフレットを置いていただけであり、より積極的に連携して拠点に準じたような場所の確保の検討が求められる。

活発な既存の活動を尊重しつつ、地域でジオパークをどのような立ち位置で推進し宣伝していくのかについて、関係者で十分議論を重ね、ジオパークとしての拠点施設やインフラの整備のあり方の方向性を見出す必要がある。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・地域の人のジッターセンター活用の増加が望まれる。周知方法や、地域での活用方針について協議する必要がある。
- ・既存の情報拠点が既に存在している。ジオパークを地域としてどのように見せていくかを協議すべきである。然別湖での情報発信の役割を果たしている民間株式会社との間では、場合によっては協定の締結なども視野に入れ、既存の活動を尊重しつつ、積極的に進めるべきである。

### E.1.5 情報、教育、研究

現在作成されている看板は、2013年に磐梯山ジオパークで行われた研修会を参考にして内容を検討し作成している。推進協議会委員兼幹事である澤田氏（福山市立大学准教授）や推進協議会副幹事長である松本氏（北海道ネイチャーセンター）に相談しながら事務局が作成した。科学的な担保は澤田氏が担い、英語表記は澤田氏が原案を作成後ネイティブにチェックしてもらっている。事務局以外が作成したパンフレットやリーフレット、イベントのチラシにも、ジオパークの表記はされており、様々な所で入手可能になっている。しかし、鹿追の大地の成り立ちや、それらが地球の歴史の中のどこに位置づけられ、どのような意味を持つのかなどについて書かれたものはない。また事務局が作成したリーフレットは内容が難しく、改善の余地がある。現段階では看板やリーフレットの内容の構築、改善をしていくような枠組みはないため、多くの人が内容や表現についてチェックできる枠組みの構築や関係作りが望まれる。

小中高一貫の教育プログラムとして新地球学というプログラムがある。鹿追町独自に進化を遂げたプログラムであり、文科省の研究開発学校の指定がされている。ESDや防災教育、環境教育などの特色が盛り込まれており、レベルの高いプログラムである。教科書には鹿追町のどこにいけば、どのようなものを学習することができるのかなど、実践で使いやすい情報が書かれており、教育現場の先生に重宝されている。ジオパークが教科書の中に記載され、ジオサイトが紹介されるなど一定の関わりは見られる。次年度以降に計画をしている小中高一貫教育を地域を巻き込んだ教育プログラムにする検討はジオパークに相応しい取り組みだが、現時点ではジオパークの活動が関わっているとは見受けられず、大きな課題である。新地球学は、教育としての先進事例ではあるが、ジオパーク教育のあり方としては他のジオパーク地域の事例も参考にできると考えられる。

センターに併設して、調査研究時の宿泊に活用できる施設を提供するなど、地域内で学生や研究者が活動しやすいサポート体制が見られる。ジオパークは国立公園の地域と重なっているが、環境省の担当者は研究に対する理解を持っている。一方で貴重な鉱物の存在を明らかにする論文がインターネット上に掲載されたことによる盗掘問題が発生している。すでに公開されている論文であるため、今後産地を完全に伏せることは難しくなっている。ジオパークとして、地域に入る研究者との関係作りを積極的に行い、研究の促進と保全や教育への活用を促進することが必要である。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・看板の作成、改修の枠組みを作成して、具体的な計画の中に盛り込むこと、また、内容の検討を多くの人々の目で行えるような関係、仕組みづくりを構築することが必要である。
- ・設置済みの看板に関して改修計画を作成すべきである。
- ・文科省の研究開発学校の指定が終了後、地域の教育プログラムとして継続してより発展させる活動を、ジオパークの運動として展開していくことが望まれる。

## E.2 その他の遺産

### E.2.1: 自然遺産

リストに28件記載されている。いずれも、凍れの大地を証拠づける、おもに最終氷期の生き残りとしての遺産がリストアップされている。代表的なものは、エゾナキウサギ・風穴地帯の蘚苔類・ミヤベイワナなどであり、またシマフクロウ・オオワシなどの猛禽類、

グイマツ・カシワ・ナラなどの樹木である。この中にはアイヌと関わりのあるものもある。環境省レッドリストに掲載されたもの、国指定天然記念物などが含まれている。しかし、E.1.1で指摘したように、ジオサイトと重複して記載されたり、本来ジオサイトにすべきサイトが含まれているので、サイトの分類カテゴリに沿ってリストの記載をしてほしい。また、然別火山と大地の形成史にこれらの優れた自然遺産を取り込み、とち鹿追にしかできない寒さが作り出した大地と自然に関係したジオストーリーをつくってほしい。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・鹿追町の大地の歴史が分かりやすい形で示されていない。科学的根拠をもって大地の歴史のストーリーを示し、更にそれを一般の観光客にもわかりやすい表現方法で示す必要がある。
- ・特筆すべき大地の歴史や見どころを整理し適切に表現するべきである。

### E.2.2 文化遺産

リストに20件記載されている。縄文時代の遺跡、開拓時代の鉄道遺産、水害復旧記念碑、家畜感謝の碑などがある。先史時代に寒冷な大地に人が住み着き、アイヌの時代を経て開拓が進み、豊かな農業が経営される地域になった歴史を物語ることができる。このように現在の農家ツーリズムへとつながる文化遺産がある。これらは、大地の形成と組み合わせれば、鹿追エリアのよいジオストーリーの題材になることが期待される。

E.1.1で指摘したように、ジオサイトと重複して記載されているものがあり、サイトの分類カテゴリに沿って修正をしてほしい。また、これらの遺産はおもに記念碑や鉄道遺産からなるが、ジオパーク資源としての保全の方法を考えてほしい。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・大地の歴史との関係を吟味したうえでサイトを選定しリスト化していく必要がある。一部、ジオサイトとの重複が見られるので、サイトの整理と分類をするべきである。
- ・地質的遺産と合わせて、ジオパーク資源としての保全の方法を協議する必要がある。

### E.2.3 無形遺産

リストに1件記載されている。然別湖の伝説を題材にした「白蛇姫舞」であり、郷土の文化芸能として定着してきている。ジオストーリーの中にどう位置づけていくかを検討してほしい。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・大地の歴史との関係を吟味し、ジオストーリーの中の位置づけを協議する必要がある。

### E.2.4 気候変動および自然災害への関わり

気候変動の影響を受けやすい永久凍土の研究地であり、ナキウサギや植生分布などの生態系も同様であり、日本のジオパークの中では地球温暖化により敏感な地域でもある。農産物の変化は、温暖化の影響の現れではないかと指摘されている。氷期と間氷期の環境変動を記録したさまざまなサイトが示す事象は、人々に将来の気候・環境変動を考えさせる材料を提供することができ有益である。

2年連続での台風で、風倒木や洪水などの被害があり、ジオツアーに使われている登山道などが使えなくなったこともあった。一方で、豪雨で削られた河川に新たなジオサイト候補地が、住民により発見されている。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・近代化以降の平均気温の変化など、ジオパークとして気候変動の影響を科学的な根拠を持って伝えられることを検討して欲しい。
- ・ジオパークが、現在の防災・減災対策に積極的にいかされておらず、連携が必要である。



### E.3 管理運営

事務局は、認定当初の専任1名・兼任3名（教育委員会に設置）の体制から、現在は、町長部局にジオパーク推進室が設置されて商工観光課長が兼務し、ジオパーク推進室は専任3名・兼任3名の体制へと強化された。室長には、前議会事務局長の町幹部が就任し、町のジオパーク活動全体を統括して推進する体制となった。それぞれの事務局員の担当業務が、保全・観光・教育・施設管理・経理・事業と明確に分担されている。一方、前述したように、拠点のセンターと事務局長が常駐する町役場が別れていることから、日常的なジオパークとしてのマネジメントに不安が残る。

専任の専門職員がまだ雇用されていないため、大学研究者の支援を受けながらジオパークの研究教育分野の活動が行われているものの、これまでの活動の継続性だけでなく、既存の活動との積極的なつながり作りや住民への浸透などを通じた、鹿追が目指す「プラットフォーム型」のジオパーク活動の展開が、図れない恐れがある。現状では、専門家が生産した学術的価値を理解し、再構成してわかりやすく伝えたり、解説板やリーフレットなどの内容を監修したり、先述したように各遺産間のつながりを考慮したジオストーリーの構築などがスムーズに進んでいない。一部の専門家の献身的な支援には限界があり、できるだけ早い時期に専門員の採用を望むものである。専門員は、学術内容を吟味するだけでなく、地域住民や子どもたちへの出前講座、保全策、防災教育などにも貢献するので、町全体にとっても専門員の採用は有益である。

推進協議会は、総会と幹事会があり、調整機関として事務局がある。幹事会は、推進協議会の実働部分をなし、教育部会・保全部会・観光（ツーリズム）部会に分かれている。幹事会には、地域住民の参画を求めて公募を行い、新たに11名の幹事が加わり、ボトムアップ運営を強化しつつある。それぞれの部会では、情報共有や企画開発・課題解決などの会議がもたれ、具体的な事業が実施に移されていることを確認した。農家、ガイドなどの優れた活動がすでにあるので、幹事会と部会をうまく機能させることで、ビジネススペースの鹿追型ジオパーク運営が期待できる。

しかしながら、2017年に改組された、幹事会と部会による運営は、まだ始まったばかりであり、以下のような改善が求められる。たとえば教育部会では、学校教育の現場を担当する教育研究所や学校教育課、社会教育課などが参加していないことにより、実効性のある議論ができておらず、「新地球学」以降のプログラムとのつながりが見られないのは、大きな問題である。また、保全部会には新たに発見された化石林の保存について検討しているにもかかわらず、専門家や国や道などの河川管理者などが参加していない。道や国の行政機関や専門家が、幹事会や部会に参加し、連携しての具体的な問題解決が図れるよう改善を求めたい。それが、「プラットフォーム型」のジオパークの活動であるはずである。

第2期中期計画（2017-2020年度）が推進協議会で作成され、「100年、1000年後の鹿追が豊かであり続けるために」という基本理念のもと、保全・教育・観光分野での達成目標を掲げている。また、5年間の予算措置を推進協議会長（町長）が表明している。ジオパーク活動を行政が支援するために、「とち鹿追ジオパークと鹿追町行政機関の連携について」が策定され、町すべての部局におけるジオパーク支援の役割と連携内容が定められている。

現地審査時のヒアリングや講評時に、すべての担当課長クラスや町議会議員（公務があった議長を除く）が参加していたことで部分的に裏付けられるが、町の各部局が、ジオパーク協議会の幹事会や部会へ、当事者の一員として参加することが求められる。

協議会の一員である環境省や森林管理局とは、登山道整備や外来生物駆除、オパール産地の保護など具体的な連携事実が確認されたが、それぞれの目的で行われているものも多く、ジオパークとして全体的な保全活動の計画は不十分である。

指摘事項 有

指摘事項：

・とち鹿追ジオパークとして求められる科学的知識を持ち、多様な分野の研究者とも対話ができ、住民や町を含むさまざまな組織の支えとなれるような専任の専門職員の採用と、それまでの間はそれに代わる実効性のある措置について早急に対応すべきである。その際には、JGN 各地域の専門員の活動状況もよく踏まえ、とち鹿追に相応しいあり方を早急に検討すべきである。

・推進協議会内部の改正が行われ新体制となっているが、特に教育や保全に関して関係する組織や他部局との連携が不十分であり、現在のボトムアップ的なあり方も大事にしつつ、課題解決をどう図っていくのが良いか、部会の役割や参画メンバーを再検討すべきである。

#### E.4 重複（オーバーラッピング）

ジオパークエリアのうち、然別湖を含む然別川上流地域の山間地は、大雪山国立公園であり、第1種～第3種特別地域と普通地域からなる。推進協議会にはアドバイザーとして環境省北海道地方環境事務所が参加している。登山道整備、特定外来生物（ウチダザリガニ）の駆除などが行われている。

指摘事項 無

指摘事項：

#### E.5 教育活動

前述したように、新地球学という非常に質が高く歴史もある小中高一貫の教育プログラムが存在する。これらは他地域の見本となるべきプログラムであり、ジオパークのネットワークを通じて情報の共有が強く望まれる。一方で、ジオパークの活動を始める前に既に確立されていたプログラムであり、新地球学を進める教育部局とジオパークとの関わりが不十分である。文科省の研究開発学校の指定は来年で終了となっているが、終了後は学校だけでなく、地域も巻き込んだ教育プログラムへと展開していき、鹿追町独自の教育プログラムの作成実施を継続していきたいとの意思表示があった。学校教育が地域とつながることは、文部科学省の方針であるだけでなく、ジオパークの教育が求めていく姿でもあるが、新しい教育プログラムを構築する中核となる町の教育研究所と、ジオパークが具体的に連携しているようには受け取れなかった。

指摘事項 有

指摘事項：

・「新地球学」の後の町の教育プログラムを、ジオパークの教育活動と明確に位置づけ、JGN 他地域のジオパークを活用した一環教育の取り組みも参考にして、鹿追らしい教育プログラムの構築を目指して欲しい。

#### E.6 ジオツーリズム

然別湖のネイチャーツアーや氷のコタン、農家によるグリーンツーリズムは、従来から高い評価を受けており、今回の審査でもガイドの質の高さは改めて確認した。それが、ジオパークに認定後、どのようにジオパーク的に変化したかに重点を置いて関係者にヒアリングした。当初は「改めてジオパークだからと言うことは、最初はなかった」、「これまでやってきたことが、ジオパークのつもりだった」が、事務局の体制や意識改革が進んだこの2年で「意識が変わった」、「ツアーの商品が作りやすくなった」という変化が起きており、ジオパークを楽しみに来る観光客も増えつつあるという。

拠点が出来たことで教育旅行の導入利用や雨天プログラムがやりやすくなったというレベルから、ジオ的な材料を積極的に活用したツアーの組み立てが然別湖周辺やグリーンツーリズムの現場でも行われていた。「大地の歴史を伝えるジオパークで、北海道に弱かった歴史を絡めてツアーができる」などと、新たなツーリズムの素材も見出されてきており、ジオパークの価値が浸透してきている。地域主体で、ジャガイモやそばという農産物のジオツアーも作られているが、その分野の科学的根拠作りはまだ十分とは言えない。

この地で継続的に永久凍土の研究をしてきた大学研究者は、学部の卒論時代から20年、ガイドたちと仲間のようにつき合ってきており、ジオパークになった後に無理矢理ジオをくっつけたようなツアーになっていない背景にあると見受けられた。

一方、今年から行ったガイド講習で、「サポートガイド」に6人が認定されているが、具体的な活躍は今後となっている。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・ 然別湖や鹿追町だけでなく、北海道の成り立ちまではイメージできるが、日本ジオパークに相応しい日本列島やここから地球が感じられるジオツアーの開発を進めて欲しい。
- ・ ジオパークとしてのツーリズムを回す拠点が、肝心の然別湖では推進協議会メンバーの拠点到留まっておき、「とちかち鹿追ジオパーク」としての拠点化を実現して欲しい。
- ・ 湖側と平地側をつなぐとちかち鹿追ジオパーク全体のツアーを、増やして欲しい。
- ・ 北海道の各ジオパークとも連携し、帯広空港や千歳空港でのジオツーリズムの案内拠点や、空港から鹿追までの途中のジオ的なツーリズム、ジオストーリーを構築して欲しい。

## E.7 持続可能な開発

### E.7.1 持続可能な開発に関する方針

鹿追町は、農業や観光分野での積極的な施策が奏功して、人口減少が見られないという現在の日本の自治体では希少な地域であり、持続可能な開発がうまく展開されている地域でもある。その中でジオパークも選択し、ジオパークが取り組みをつなぐプラットフォームになるという気づきを共有して、これらの戦略を確かなものにしようとする意図は強く感じられる。審査でも、バイオガスプラントを組み入れるなど、この分野の視点はユニークである。ビジネスとしては大きくないが、若者のアイデアを応援するマンゴーの栽培なども、話題性はある。

一方で、ジオパークのプラットフォームとしての機能は、まだ動き始めたばかりであり、長期的な視点で取り組みが必要なこの分野で、ジオパークとして具体的にどのような活動をしていくかは、まだ本格的に着手しているようには見受けられない。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・ バイオガスプラントを、ジオパーク関連施設として位置づけるのであれば、ジオパークとしての見える化や、関連分野も含めたツーリズムでの積極的な利用を検討して欲しい。
- ・ ジオパークとして、SDG'sを自分事化するような議論など、鹿追に相応しい今後の持続可能な開発の方針の作成を検討して欲しい。

### E.7.2 パートナーシップ

多様なステイクホルダーが集まった推進協議会といいながら、多くは行政事務局主導となり課題が指摘されている日本のジオパークの中で、鹿追はそもそも地域に根付いた活動主体があり、ビジネスとしても成立している。鹿追としてのブランド化も、観光協会の「空いろ、森いろ」というWebサイトのように、優れた取り組みもあるが、それらがようやくとちかち鹿追ジオパークのプラットフォームに乗り始めたところだ。幹事会の部会で、それらの関係者が主体的に参画し、ツアーの造成を実現し始めたのはその事例と言える。

これらの既存の活動を、ジオパークの活動として位置づけていく上では、国内ジオパークではあまり例がない具体的な協定など、ビジネスが回せるような取り組みが生まれる可能性がある。

地元の大学などとの協定は、現時点では特に行っていない。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・ 協議会メンバーである鹿追町観光協会のWebサイトに、ジオパークについての記載がないなど、幹事会や部会の動きと、組織的な連携とが必ずしも十分にリンクしていない。鹿追らしいプラットフォーム型の具体的な連携策の検討が必要である。

- ・既に研究者との継続的な接点があることから、個人的な連携に留まらず、大学との協定など、組織的に、持続可能な仕組みにするよう検討すべきである。
- ・然別湖のジオパークとしてのツーリズムを回す拠点が、協議会メンバーである事業者の一角で行われているだけに留まっており、ビジネスベースでの連携を可能にする協定を結ぶなど、鹿追らしいパートナーシップの組み立てを検討して欲しい。

### E. 7. 3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

鹿追町は、他地域ではまだ行っていない活動を、積極的に取り組む意識が町行政だけでなく住民にも浸透しており、「助けて下さい」という事務局からの呼びかけにも積極的に反応したり、観光（ツーリズム）部会でボトムアップなツアーが作られるなど、地元コミュニティが積極的に参画していることが確認された。また、今年の台風後にジオサイト候補地を住民が発見したのも、ジオパークの価値が広く認識されつつあることを示している。

また、ツアーにおいては地名に残るアイヌ語から、アイヌ民族の暮らしぶりなどを紹介したり、今年2月に環境省の支援で行われた「とち鹿追ジオパーク学会 2017」で、中学生がアイヌについて学んだことを壁新聞で発表したりしている。

幹事会や部会で、ボトムアップな議論が行われる一方で、町の教育方針などの意志決定にジオパークが参画できていないなど、せつかくの地域力が効果的にいかされていない。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・地元コミュニティの参画には、科学的な根拠作りを支える学術専門員とともに、エリア全体の課題や人材について広く認識している町行政の積極的な連携が不可欠であり、専門員の雇用とともに、行政主導ではない地域のボトムアップに基づく持続可能なプラットフォーム型のとち鹿追ジオパークの運営方策を、検討して欲しい。

## E. 8 ネットワーク活動

北海道やJGNの大会や研修会、日本地球惑星科学連合大会などに参加し、新地球学や台風災害の取り組み、ジオパーク運営における悩みなどを発表してきた。また、鹿追町議会による視察が、洞爺湖・有珠山、伊豆半島、三笠、アポイ岳、糸魚川、島原半島の7ヶ所ジオパークで行われており、また推進協議会の個人的レベルでの自主的なジオパーク視察も行われている。

とち鹿追ジオパークには、ジオパークの視点を導入することによって、グリーンツーリズムやガイド内容などが良くなったという事例がある。

2年前の「助けて下さい」という事務局からの地域住民への働きかけや、鹿追町を訪れたJGN他地域の関係者らのアドバイスが、現在のとち鹿追ジオパークの姿につながっており、これらもネットワークへ共有すべきよい取り組みである。

このような鹿追の優れた実践例を積極的に公表・公開し、日本のジオパーク運動に貢献してほしい。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・鹿追町の優れた活動について、情報発信が足りていない。積極的な発信をすることにより、ネットワークへ貢献することが望まれる。
- ・ネットワークの交流の場へ、ジオパーク関係者以外にも参加の機会が与えられる仕組みを作ることが望まれる。

## E. 9 地質鉱物資源の販売

ビジターセンター横の売店において、エリア外で採集された黒曜岩が一袋販売されていた。販売しないよう求める。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・エリア外の黒曜石について、販売停止を求める姿勢を示す必要がある。

## E. 10 防災・安全対策、防災教育、災害対応

定評のある「新地球学」は、防災教育としても位置づけられている。

また、2年連続の台風災害の際には、事務局が所有するドローンを使った被害状況把握が行われるなどの災害対応へも貢献している。風倒木などの被害状況を、ジオツアーのなかで解説するなどの取り組みも行われている。

一方で、町役場の防災・減災対策に、ジオパークが積極的にいかされておらず、連携が必要である。

指摘事項 有

指摘事項：

- ・自治体として取り組むべき防災対策に、ジオパークがどうプラットフォームできるか、具体的な検討が必要である。

## F. 総括

とちぎ鹿追ジオパークは、保全、教育・研究、ツーリズムというジオパークの活動の要素それぞれに、以前から定評のある実績があり、農業や観光分野でも成功して、人口減少が見られないという中で、ジオパークに認定された地域である。地域の持続可能性に切迫感を持ってジオパークの運動に取り組んでいるような地域とは異なることもあって、認定後、求められた一定のハードの整備は行ったものの、一時期は活動が立ち止まっていた感があった。

その中で、改めてジオパークの活動を行う意義を問う取り組みを始め、問題を投げかけられた地域もそれに答える中で、定評のある活動をつなぐプラットフォームこそがとちぎ鹿追ジオパークの意義であるという答えに行き着いた。事務局体制も強化され、町全体の多様な活動を知る町幹部が事務局長に就任している。

この結果、地域のさまざまな活動のつなぎ役・エンジン役がジオパークであるという認識が広がって、これまではそれぞれであった地域の活動に、ジオパークがつながりを生み出す役割を果たしつつあることは確認された。ただ、現時点でのプラットフォーム型の活動の実践は、一部のエコツアーやグリーンツーリズム、保全などに留まり、最も行政的な関与が行いやすいはずの教育では未着手の段階である。

ジオパークがプラットフォームになるためには、多様な地域の活動に根拠を与えてつなげ、新たな根拠も見つける力を持つ学術専門員の存在が不可欠だ。現状、この地をフィールドとする遠隔地の研究者が献身的に取り組んではいるものの、今後の発展を支え続けるのは困難である。また、全体を牽引する事務局長と、専任職員が別の場所で活動するという事務局体制にも不安は残る。

再認定審査を通じて、推進協議会長である町長が、これまでは否定的だった学術専門員の雇用の必要性を強く認識し、審査後の町議会の所信表明で専門員雇用を明確にした。学術専門員が雇用されていれば良い、というだけでないことは、JGN各地域での現状を見れば明らかであり、他地域の状況を把握し、鹿追に長期的に必要な学術分野と定評のある地域の活動をつなぐ人材をしっかりと見極めて雇用すれば、この地域のジオパークの持続可能性が高まると考える。みんなで考えて「プラットフォーム」という言葉に行き着いたように、鹿追としてどのような学術専門員が求められるかをよく考え、出来るだけ早く雇用して、持続可能な体制を作り出すことが求められる。

## G. 指摘事項

- ・提案：グリーンカード
- ・主な指摘事項

### 1. 地形地質遺産の保全 (E. 1. 1 地形地質遺産および保全)

・地形地質遺産や自然遺産、文化遺産、無形遺産の中で、ジオパーク資源として扱うものをすべてジオサイトとして分類している。ジオパーク資源として活用するサイトについて、ジオサイト、自然サイト、文化サイト、その他サイトのように分類し直してリストを作成し、さらに台帳の整備を望むものである。

- ・サイトを整理していく過程で、それぞれのサイトが持つ科学的価値を再検討し、また火山活動による大地の形成と自然や暮らしとの関係を検討して、多くの魅力のあるジオストーリーをつくってほしい。
- ・然別火山と大地の形成史が簡明にわかるイラストがほしい。イラストがあると、解説板やリーフレットなどに掲載でき、現状では理解しづらい大地の成り立ちのストーリーがわかりやすく示されると思う。また自然や暮らしとの関係を示す時にも役に立つ。
- ・野外解説板や印刷物、ビジターセンターなどの展示物等は、作成したら終わりではなく、より人々に伝わるよう不断に研究し、改良していくことが望まれる。
- ・西瓜幕火砕流露頭では、見学の妨げになる草や低木の伐採や野外解説板の露頭近くへの移設が求められる。連続露頭のため、案内標柱や解説板がないと、どこを見ればよいのか現状ではわからない。また露頭から何がわかるのかを近くにある野外解説板で親切に示す必要がある。これができていないと、ジオパークの評判を落とす恐れがある。他のジオサイトも同様に来訪者の視点で検討し、さらなる改良をおこなってほしい。
- ・化石林や亜炭層などのジオサイト化は、鹿追エリア（平地部）の形成を物語る貴重な根拠なので、国や北海道などの河川管理者を保全部会に参加してもらいぜひ実現してほしい。
- ・火山の恵みの側面をもち、ジオパーク活動と積極的に連携すべき温泉ホテルが推進協議会の構成メンバーになることを望む。

## 2. その他の遺産について (E. 2.1: 自然遺産、E. 2.2 文化遺産、E. 2.3 無形遺産)

- ・氷河時代の環境を示すサイトが数多くあり、かつ過去から現在に至る気候変動や環境変化を学習できるジオパークは、日本においてはここだけである。サイトを整理していく過程で、それぞれのサイトが持つ科学的価値を再検討し、大地の形成と自然や暮らしとの関連価値を明らかにしてほしい。サイトリストから次のような関連価値があると思われるので、ジオストーリーの題材として研究してほしい。氷河時代の環境を示すすべての要素のリストアップ、永久凍土とナキウサギの関係、永久凍土と農業、爆裂火口の形成や斜面崩壊と動植物の棲み分け、火山成長と山麓の平坦面の形成、火砕流や泥流・河岸段丘と土地利用の違い、火山灰土壌と農業、農地整備における地下水と暗渠・明渠の設置、水害との関係、開拓と農地整備の歴史など。また、これらのジオストーリーを解説板や印刷物、ガイド内容、教育などに反映してほしい。

## 3. 管理運営 (E3)

- ・専任の専門職員がおらず、大学研究者の支援を受けながらジオパークの研究教育分野の活動が行われているものの日常的な活動の継続性について難がある。12月6日の町議会で、推進協議会長（町長）が専門員の採用の検討を明言した。できるだけ早い時期に専門員の採用を望むものである。専門員は、学術内容を吟味するだけでなく、地域住民や子どもたちへの出前講座、保全策、防災教育などにも貢献するので、町全体にとっても専門員の採用は有益であると考えられる。
- ・推進協議会運営の核となるべき幹事会と部会について以下の改善が要求される。たとえば教育部会では、学校教育の現場を担当する教育研究所や学校教育課、社会教育課などが参加していないことにより、実効性のある議論ができていない。また、保全部会には新たに発見された化石林の保存について、専門家や国や道などの河川管理者などが参加していない。必要に応じて道国関係の行政機関や専門家が、幹事会や部会に参加するよう改善を求めたい。
- ・ジオパーク活動を行政が支援することが文書で決められているが、これを確実に実行に移してほしい。先述したように、町行政の担当が幹事会や部会へ積極的に参加し、推進協議会の一員として、住民や農家などの方たちと一緒にジオパーク（鹿追）をよくするために考えてほしい。

## 4. ネットワーク活動 (E8)

- ・とち鹿追ジオパークでは、ジオパークの視点を導入することによって、グリーンツーリズムやガイド内容などが良くなったという事例がある。このような鹿追の優れた実践例

を積極的に公表・公開し、日本のジオパーク運動に貢献してほしい。

・鹿追には、畑作・酪農・畜産・環境保全など住民の自主的経済活動の豊かな展開がすでにあり、そこにジオパークのような大地と自然、暮らしをつなぐプラットフォームが加わることによって、さらなる地域発展をめざしている。このような事例は日本のジオパークになく、海外に参考例を求めたほうが良いと思われる。ネットワークは日本だけでなく、アジアやヨーロッパ、ラテンアメリカにもあり、世界のジオパークを結ぶネットワークの活動もある。ぜひ、世界のジオパークと交流し、鹿追の地域経営の参考にしてほしい。「新地球学」による国際交流の経験があるので、その経験をもとに国際交流を進めてほしい。

#### 5. 地質鉱物資源の販売 (E9)

・道の駅において、エリア外で採集された黒曜岩が一袋販売されていた。販売中止を求める。

#### 6. 可視性 (ビジビリティ) (E.1.3)



・既存の活動とジオパークの関り方について、地域で協議し方向性や具体的な活動計画を示す必要がある。また、それを踏まえて既存の活動を尊重しつつ、地域としてジオパークをどのように見せていくのかという方針を地域で協議し決めていくべきである。既存の活動団体には民間の会社も含まれているので、行政がどのように関わっていくのかも含め、具体的な活動に移していく必要がある。

#### 7. 教育 (E.1.5)

・文科省の研究開発学校の指定が来年度に終了するが、今後は学校だけでなく地域にも広げた教育プログラムとして継続していく方針という。これは、ジオパークで求められる教育の一つのあり方だが、現状では組織的連携がなされていない。新地球学の後の展開は、他のジオパークでの学校と地域が関わる教育の取り組みなども参考に、プラットフォーム型のジオパークに相応しい教育のあり方を進める必要がある。この分野でも学術専門員の存在は不可欠となるはずである。

### H. 行程表

現地審査視察内容・場所	主な対応者	気づいたこと／コメント
1日目 (2017年11月20日)		
プレゼンテーション	吉田弘志 (推進協議会長・鹿追町長)  他 16名 別紙参照	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿追町の概要や特長（自然ツーリズム、農業、教育、バイオマスプラントなど）、認定を受けてから4年間のジオパークとしての活動、今後目指すとかち鹿追ジオパークの形、今回の再認定現地審査の日程が説明された。</li> <li>・鹿追町の特徴として語られた活動の内容はレベルが高く、他地域の見本とできるものである。</li> <li>・ジオパークの活動やジオパークとしての町のマネジメントは、ようやく目指す形や方向が話し合わせられ意思決定がされた段階である。具体的な活動方針はまだ答えが出ていない。</li> <li>・とかち鹿追ジオパークの目指す像を理解し、実現のために具体的に何をすべきか、それぞれの立場で何が出来るのかを早急に話し合っていく必要がある。</li> </ul>



<p>ビジターセンター</p> 	<p>木原芳彦 (事務局員) 澤田結基 (推進協議会委員兼幹事・福山市立大学准教授) 大西潤 (事務局員)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2014年4月に職員が常駐する拠点施設としてオープン。2016年4月にはリニューアルしている。</li> <li>・リニューアル後は来館者が増大しており、リニューアルの効果が見られる。</li> <li>・雨の日の見学場所としても活用されている。</li> <li>・プロジェクションマッピングを始め、展示物も多く充実している。</li> <li>・ジオパークの拠点とされており、何かあった時の立ち寄り場所として徐々に認識されつつある。車に撥ねられたナキウサギが持ち込まれたという事例が紹介された。</li> <li>・町外の方の利用が多い。もっと町内にもPRして、町の人が気軽に立ち寄れるような施設を目指すというのではないかといい。</li> </ul>
<p>夕食会</p>	<p>阿久澤小夜里 (推進協議会委員兼幹事・ボレアルフォレスト)  他 10名 別紙参照</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ツーリズム関係者が多く集まった。大きく分けるとプロガイドと役所の職員。</li> <li>・役所観光担当の職員は、レンタサイクルの話をしていましたが、プロガイドや農村ツーリズム関係者の話には一度も出てこなかった。</li> <li>・持続可能な形として、ガイド団体やそのたツーリズム団体が役所から独立しているのは理想的である。しかし、全く別々に活動している状態は好ましくない。今後はお互いがどのような距離感と関係性であるといいのかは、ジオパークが間に入りながら模索していくというのではないかといい。</li> </ul>
<p>2日目 (2017年11月21日)</p>		
<p>風穴トレッキング</p> 	<p>阿久澤小夜里 (推進協議会委員兼幹事・ボレアルフォレスト) 澤田結基 (推進協議会委員兼幹事・福山市立大学准教授)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質地形(流れ山や風穴)と生態系(岩石上の苔や松、ナキウサギ、その他植物)の話がバランスよくされていた。</li> <li>・案内者はプロのネイチャーガイドであり、安全面の配慮や声の大きさ、わかりやすい言葉遣いなど、ガイドとしてのスキルは非常に高い。質問への受け答えもしっかりしており、またそこから話を広げる引き出しも持っている。</li> <li>・ジオパークに関わりだして、地質地形の話も案内に取り入れるようになり話の幅や物事を見る視野が広がったと語っていた。ジオパーク活動をプラスに活用できている。</li> </ul>




<p>然別湖ネイチャーセンター</p> 	<p>石川昇司 (北海道ネイチャーセンターチーフ)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カウンターにジオパークのリーフレットが置いてある。</li> <li>・体験学習を主としたプログラムを多数持っており、内容は充実している。ジオパークを始める以前から、既に確立していたものである。</li> <li>・修学旅行生の受入態勢も整っている。</li> <li>・修学旅行で求められる体験の質が年々高くなっており、新学習指導要領への対応なども視野に入れている。</li> <li>・ジオパークが間に入り、町の教育委員会や学校現場の先生とのやり取りが増えると、ジオパークをプラスに活用できるようになるのではないか。</li> </ul>
<p>扇ヶ原展望台</p> 	<p>大西潤 (事務局員)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新規認定時の指摘事項。</li> <li>・看板の高さや大きさや文章量など、眺望を邪魔しないようにとの工夫がみられる。</li> </ul>
<p>調査・研究者向け滞在施設</p> 	<p>澤田結基 (推進協議会委員兼幹事・福山市立大学准教授) 大西潤 (事務局員)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現地審査期間中、実際に澤田氏が活用していた。</li> </ul>
<p>教育関係者ヒアリング</p> 	<p>大井和行 (推進協議会委員・町教育長) 島田諭 (町教委教育指導室長) 草野礼行 (町教委学校教育課長) 事務局 3名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中高一貫の教育プログラムである新地球学について主に説明を受けた。</li> <li>・周辺自治体からの評判はいいが、内容の共有などはあまりされていない。</li> <li>・教育プログラムのレベルは高く、他地域の見本にできる。ジオパークを始める以前から確立したプログラムである。</li> <li>・来年度で文科省からの補助金は終了するが、今後も続けたいという意思は強くあるようである。具体的な動きにはまだなっていない。</li> <li>・子供ガイドなどでジオパーク活動に能動的に関われるのではないかという案も話している中で出てきた。まだ確立はしていないがジオパークが実現に向けたパイプ役を担える可能性がみえる。</li> </ul>

<p>授業視察</p> 	<p>橋本健 （通名小学校教頭） 児童 3名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6年生がビジターセンターへ訪問し、そこで見学したことから自分でテーマを決めて調べ学習をしていた。</li> <li>・調べ学習はタブレットを活用して発表形式でまとめていた。</li> <li>・児童の地域の自然についての知識も多い。お勧めの場所として然別湖やその周辺の自然を挙げていた。地域について知識として学ぶだけではなく、疑問を見つけて調べるといった学習方法が身につけているようだった。</li> </ul>
<p>昼食</p> 	<p>太田道夫 （通名小学校校長）  他 教員 2名 児童 7名 事務局 3名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高学年児童と先生と一緒に給食を頂いた。</li> <li>・児童は鹿追町の地形について、急な質問にも的確に答えていた。</li> <li>・新地球学の元祖である鹿追学を学んだ世代を親に持つ子どもがおり、教育の歴史を感じる事ができた。</li> <li>・ジオパークで世代を繋ぎ、交流ができるとよりプラスとなる活用ができるのではないかと。</li> </ul>
<p>環境省担当者ヒアリング</p> 	<p>原澤翔太 （推進協議会アドバイザー・環境省）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国立公園内に産するオパール盗掘に対する対処や、看板について話された。</li> <li>・オパールの盗掘問題は詳細な採取地が示された論文が公開されていることもあり対処が難しく、環境省担当者も頭を悩ませている。</li> <li>・ジオパークは教育やツーリズムなどが表に出やすいが、保全や保護も重要な活動である。オパール以外でも外来種駆除などの活動で環境省との連携が見られ、今後も続けていくことが望まれる。</li> <li>・今回のオパールでは、研究者との意思疎通がうまくいっていないところがあるが、研究面に対しては概ね協力的のようである。</li> </ul>
<p>東瓜幕流山地形</p> 	<p>大西潤 （事務局員） 志賀敏彦 （推進協議会幹事） 羽根田広幸 （推進協議会幹事） 事務局 2名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車窓から説明</li> <li>・私有地の為、所有者との協議をしながらジオサイトとして登録している。</li> <li>・新規認定時に指摘事項として挙げられていた露頭は、積雪のため当日は確認できず。</li> </ul>

<p>カントリーホーム風景</p> 	<p>清水智久 (ジオマスター)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジオマスターの店。</li> <li>・店内にはパンフレットやジオマスターの店のプレートなどが置かれている。</li> <li>・平野部で行われている酪農で、ツアーや修学旅行生なども立ち寄る。</li> <li>・ジオパーク活動前にも酪農の説明や見学などを受け入れていたとのことだが、酪農をしている平野部がどのようにできたのかなどのお話もするようになったと話していた。ジオパークがプラスに活用できている。</li> <li>・絶品の食を入り口にすると、多くの人に興味をもってもらえるので、ジオマスターの店の今後の活躍が期待される。</li> </ul>
<p>バイオガスプラント</p> 	<p>伊藤正博 (町農業振興課環境保全センター係長)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町内の酪農家からふん尿を集め、堆肥への変換、発生したバイオガスからの発電、余剰熱を利用したハウス栽培やチョウザメの養殖がおこなわれている。また、発生バイオガスからメタンガスを抽出し水蒸気を反応させることで水素を発生させ、水素エネルギーとしての活用も行われている。水素車があり、公用車として活用されている。</li> <li>・循環型農業や次世代エネルギーとして注目されており、各地から多くの視察が来ている。</li> <li>・バイオガスプラントのパンフレットに町長の言葉としてジオパークがふれられている。</li> <li>・バイオガスプラントとジオパークそれぞれにきた視察、または観光客に相互に紹介しあっている。これもある、あれもある、という紹介だけではなく、鹿追町の町づくりの中でそれぞれどのような立ち位置で進めていくものであるのかを語れるようになるとよいのではないか。</li> </ul>
<p>保全ヒアリング</p> 	<p>吉田弘志 (推進協議会長・鹿追町長)</p> <p>他 13名 別紙参照</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成27年10月の台風23号の被災時に行われた連携について話された。国立公園内の登山道で倒木が発生したということもあり、道森林管理署、環境省、ガイド等と連携した活動が行われた。</li> <li>・事務局の大西氏が各団体とのパイプ役になっている。</li> <li>・平野部で水害が発生した際、推進協議会がドローンで被害状況を確認した。</li> <li>・ガイドからは、事務局が相談窓口になっており役場への声が届きやすくなったこと、また人手の提供もされやすくなった。</li> </ul>

		<p>たと声があった。ジオパーク活動がプラスになっている。今後は事務局の負担等も考え、役所内の横の連携も取れてくるといいのではないかと。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時以外でも保護保全は行われるべきであり、そのためにはそれらの価値を調査し把握する必要がある。その役割は現状大西氏と澤田氏が担っているが、専門職員が事務局に常駐することが望ましい。会長からは大学との連携をしながらやっていきたいと回答があった。</li> </ul>
<p>全体ヒアリング</p> 	<p>吉田弘志 (推進協議会長・鹿追町長)</p> <p>他 34名 別紙参照</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの立場から、ジオパークに関わりだしてどのように変わったのかという話などをしてもらった。</li> <li>・全体的に、地域について見方が変わった、意識が変わったという話がされた。</li> <li>・ジオパーク活動を通して、具体的に動いた例として、ツーリズム幹事会から動きが始まったジャガイモ食べ比べツアー、蕎麦食べ比べツアーなどが挙げられた。地域の話から形になったものの成功体験から自信に繋がっている。</li> <li>・発足した幹事会はそれぞれ2～3回程度開催されている。組織を形作り動き出しているが、それらの仕組みを理解し定着するにはもう少し時間がかかるのではないかと。</li> </ul>
<p>町長ヒアリング</p>	<p>吉田弘志 (推進協議会長・鹿追町長) 黒井敦志 (事務局長)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿追町は町づくりに自信と誇りを持っている。</li> <li>・既にある活動をジオパークで繋ぎ合わせる、プラットフォーム型の活動をと話していた。ただし、具体的にどうするかは今後の課題の要である。</li> <li>・常駐の専門職員に関しては、予算等の関係からすぐには答えが出せないようだった。地域おこし協力隊制度の活用なども視野に入れているようだが、確実に有能な人材が欲しいと強くいっており、慎重な姿勢を見せていた。どういう人が欲しいのかも、今後の検討課題である。</li> </ul>
<p>交流会</p> 	<p>吉田弘志 (ジオ推進協議会長・鹿追町長)</p> <p>他 27名 別紙参照</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会場となった「大草原の小さな家」はレストランとコテージを運営している。平野部での事業としてこのような形態をとる民間事業者はいくつかある。</li> <li>・元々の地域性として、緩やかな繋がりが住民にあり情報交換が行われていたようである。</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・開拓の土地であることもあり、どの人も何世代かさかのぼるとどこかから移住してきた人ばかりである。そのため、外部の人に対する受入れは暖かい。</li> <li>・ジオパークに対しても基本的には協力的であるが、やはり新しい事業という意識があるようである。言葉自体は新しいが、今までしてきたことの積み重ねが大事であり、それらを繋ぎ合わせてより良いものに地域の人全員でしていく、という意識が共有されれば、それぞれの活動が更に飛躍していくのではないかと。</li> </ul>
3 日目 (2017 年 11 月 22 日)		
<p>ツーリズムヒアリング</p> 	<p>松本宏樹 (ジオ推進協副 幹事長・北海道 ネイチャーセン ター)</p> <p>他 10 名 別紙参照</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グリーンツーリズムについての説明があった。体験プログラムも充実しており、レベルは高い。ジオパーク活動の前から確立されている。</li> <li>・ビジターセンターは積極的に活用されている。</li> <li>・ジオパークは役所がしていることという認識が強い。</li> <li>・ツーリズムの実績もあり、皆プライドを持ってやっている。ジオパークを前面に押し出す方法や、ジオパークに協力するよう要請する方法は合わないと思う。</li> <li>・ジオパークという活動をするのが目的なのではなく、ジオパークの理念や考え方を鹿追町に取り入れることで、ツーリズムはどのように発展することができるのか、ということツーリズム関係者の中から出てくるようにアプローチすべきではないかと。</li> </ul>